

廃校利用による集落活性化のあり方について 山形県金山町を例に

奥田裕規、垂水亜紀（森林総研）・村松真（金山町教育委員会）

はじめに

金山町は、山形県の北東部最上地域に位置し、1878年7月、東北、北海道を旅する途中立ち寄った英国地理学会特別会員イザベラ・バードは、金山町のことを「非常に美しい風変わりな盆地、山頂までピラミッド形の杉の林で覆われ、北方へ向かう通行をすべて阻止しているように見えるピラミッド形の丘陵の麓にある町、ロマンティックな雰囲気のある場所」（イザベラバード、2000年、「日本奥地紀行」、高梨健吉（翻訳）、平凡社ライブラリー）と紹介している。そこでは、美しい街並みを目指した景観づくりが、1963年から現在に至るまで、継続して進められ、金山型住宅が建ち並び、落ち着いた景観が形成されつつある。多くの人々がそこを訪れ、町中をゆったりと散策する。そして、金山町北部の山あいにある総戸数36戸の谷口集落にも年間16千人もの人が訪れる。この人たちの目的は廃校になった分校を利用し、谷口集落住民が中心になって運営する蕎麦屋である。本報告では、どうしてこの谷口集落で、このような取組が可能だったかを検証する。

調査方法

1996年3月に閉校された谷口分校を利用した集落活性化のための取組の実態把握のために、山形県金山町谷口集落住民や集落外の関係者への聞き取り調査を行った。

結果と考察

谷口地区は地区の人口、世帯数に殆ど変化がなく、住民のまとまりが強い。その精神的支柱は、1945年に創設された金山小学校谷口分校である。分校が地区住民の「精神的支柱」になり得たのは、転勤せずに「地域の教師」として、子供の教育と住民の教育に、定年までの28年間を捧げられた大場先生の存在が大きい。金山町には谷口分校以外に3つの分校があり、それぞれ漆野分校（1996年3月閉校）は取り壊し、朴山分校（2001年3月閉校）は教育文化資料館に、田茂沢分校（2001年3月閉校）は道草分校（木工・クラフト館）に転用されたが、その利用に広がりはなく、集落の活性化に結びついていない。谷口分校の利用について何回も地域で話し合い、学校を生かした農村体験をやりようということになったが、これだけでは経営として難しいので、コンスタントに営業する部門としてそば屋（「がっこそば」）をやることになった。大場先生の教えで、若いときから集まって議論する機会が多かったこと、役場職員、町議会議員たちからアイデアをもらえたこと（現在も運営委員で協力してくれている）、町外の協力者（宮城県や東京在住）があったこと等あって、この取組は実現した。「当初はそば粉を天童のそば屋から購入していたが、減反水田の高度利用組合であるドリームファーマーズが転作作物としてそば生産を始めたのでそこから調達するようになり、地域連携の取組が広がってきている。

（連絡先：奥田裕規 hironori@ffpri.affrc.go.jp）